

妙見祭の亀蛇 (みょうけんさいのきた)



亀と蛇が合体した亀蛇は、「ガメ」の愛称で親しまれている妙見祭の人気者で、妙見の神さまが亀蛇に乗って海を渡ってこられたという伝説を元にして作られました。

亀蛇が妙見祭の行列に加わるようになったのは、今から300年以上前の天和・貞享頃(江戸時代・1680年代頃)と考えられています。

展示中の亀蛇は、現在活躍中の亀蛇が作られる前に、実際に祭りで使われていたものです。

部品には、作られた年が書かれているものもあり、壊れたところを修理しながら町の人たちが大事に受け継いできたことがわかります。

尾の部分



胴体の部分
裏に作った人の名前や
年が書かれています。



昭和十五年十一月一日
大工 結城 山根寛一
世話人



頭と目
頭の裏側に、明治40年に作られたことが書かれています。



首の部分
伸び縮みするように作られたバネの
ようなものに布をかぶせます。



腰巻き
海を渡ってやってきたのを表
しているような波の模様が描
かれています。
昭和46年に作られたことが裏
に書かれています。



だ染麻尻
よめ糸尾
。たをの
も赤毛
のくは

足
竹を編んだ上
にい草で指の盛り
上がりをつけ、和
紙をはりつけて
色を塗っています。



首を支えている
棒を胴体に差
し込むための輪



組み立て
る時などに
使った設置
用の柱。

幕や尻尾を外したところ



胴体の上に乗せる 布団
亀の甲羅を表していて、甲
羅を囲んだ白いロープのよ
うなものは白蛇を表してい
ると伝えられています。